読み継がれる『源氏物語』

広島大学図書館収蔵
物語コレクション

『源氏物語』は、平安時代中期に紫式部によって著された長編物語である。その影響力は絶大で、『源氏物語』成立以後、『源氏物語』に影響を受けた物語が次々に生み出された。また、その影響はジャンルを越え、例えば和歌の世界においても『源氏物語』は必読の書となっていった。鎌倉時代初期の歌人藤原俊成（しゅんぜい）が、六百番歌合の判詞に記した「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」（冬上・十三番）という言はあまりに有名である。

今回の小展示では、『源氏物語』成立以前の物語である『竹取物語』や『伊勢物語』の写本・版本、広島大学図書館収蔵の『源氏物語』の写本版本の類、また『源氏物語』以後の物語や、さらに現在まで次々に生み出されている『源氏物語』の現代語訳の中から代表的な作品を展示し、『源氏物語』がどのような文学史の流れの中で生み出され、そして現代まで読み継がれてきたのかを概観する。

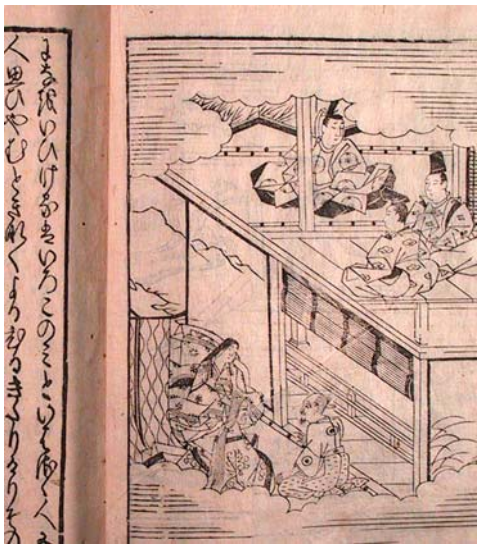
広島大学大学院文学研究科　第四回「文藝学校」 展示目録

平成 18 年 10 月 14 日（土）「本の学校」多目的ホール

1.『源氏物語』前史

「絵入『竹取物語』」　版本　二冊〔大国　七四二〕

『竹取物語』は、平安時代初期成立の物語。作者未詳だが、従来男性の手によるものと言われている。『源氏物語』絵合巻には「物語の出で来はじめの祖なる竹取物語」とみえる。展示品は、江戸時代の版本で、『竹取物語』の代表的な場面が絵で描かれている。



図版1（左）：　竹取の翁に育てられ美しい姫に成長したかぐや姫に求婚者が次々とあらわれる
図版2（右）：　月からの使者とともに月へ昇天するかぐや姫

『伊勢物語』　写本　一冊〔福尾文庫　第二〇号〕

『伊勢物語』は、在原業平に擬した主人公の初冠（ういこうぶり）から亡くなるまでを描いた歌物語。『源氏物語』同様、後世への影響は大きく、藤原俊成は、『伊勢物語』百二十三段を踏まえ「夕されば野べのあきかぜ身にしみてうづら鳴くなりふか草のさと」（『千載和歌集』巻第四・秋上・二五九）という自讃歌をなした。当該本巻末に、天福二年（1234）正月藤原定家書写の本奥書がみえ、行間の勘物（かんもつ）も天福本系諸本と共通していること等から、天福本系を親本とした転写本であると思われる。

図版3（左）：
福尾文庫『伊勢物語』表紙
図版4（右）：『伊勢物語』初段

「奈良絵本『伊勢物語』」　写本　二冊〔大国　五〇〕

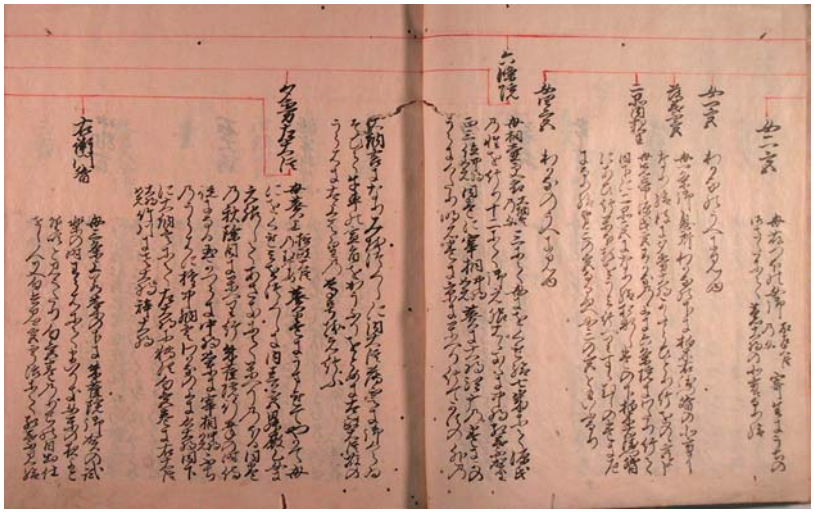
展示品は、室町時代後期から江戸時代中期にかけて作られた絵入り写本。
『伊勢物語』の百二十段余りある章段の中から代表的なものが、絵を織り交ぜて描かれている。

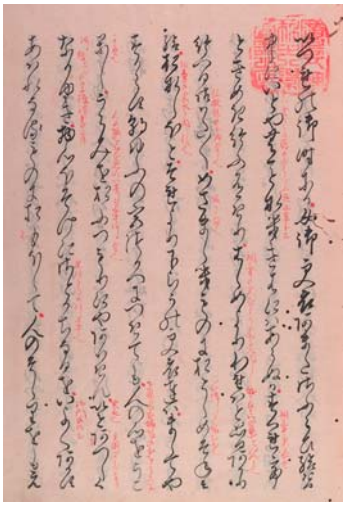
図版5：　第二十段の一場面。男主人公は、都への途次、地方に残した恋人に楓を添えて和歌を送る。
画面中央で楓の入った箱を手に持っているのが、男からの使者。

2.『源氏物語』の写本・版本

『源氏物語』 写本　十冊〔大国　二二〇一〕

残念ながら『源氏物語』の原本は現存しない。本文の内、最も古態を留めているのは、国宝『源氏物語絵巻』の詞書である。写本としては鎌倉期のものが古いが、五十四帖揃いのものとなるとさらに室町期にまで降る。展示品は、桐壷巻から夢浮橋までを収めた十冊本。巻頭には登場人物の系図を収める。江戸期の書写であろう。

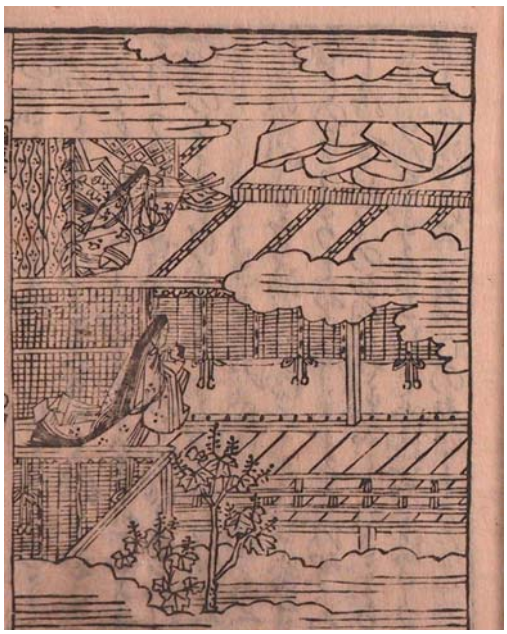




図版6（左）：巻頭登場人物系図　　図版7(右)：　桐壷巻冒頭部

「絵入『源氏物語』」　版本　三〇冊〔大国二二七三〕

江戸時代は空前の『源氏物語』ブームにあり、『源氏物語』の版本も多数出版された。展示品はそれらの一つで、源氏物語五十四帖を、主要場面の絵を添えて刊行したものである。近世中期から後期の刊と思われる。



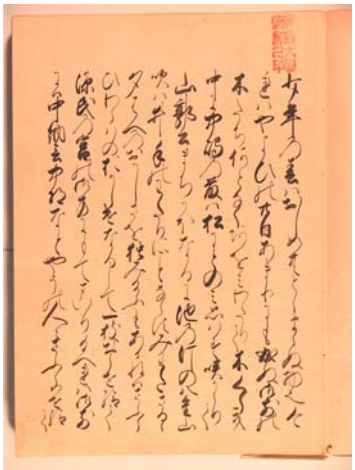
図版8(左)：　桐壷巻の一場面。幼い光源氏を抱く母桐壷更衣。御簾に顔が隠れているのが父桐壷帝。

図版9(右)：　夕顔巻の一場面。光源氏の恋人夕顔は、同じく光源氏の年上の恋人六条御息所（ろくじょうのみやすどころ）の生き霊に取り殺される。

読み継がれる『源氏物語』 ―広島大学図書館収蔵物語コレクション―
平成 18 年 10 月 10 日　広島大学図書館研究開発室　発行

3.『源氏物語』以後の物語

『狭衣物語』 写本　四冊　〔国文二二三二N〕
十一世紀後半頃成立の物語。男主人公狭衣（さごろも）の恋の遍歴を描く。狭衣の人物造形には、『源氏物語』宇治十帖の主人公薫（かおる）の面影が色濃くみえる。鎌倉時代の歌人藤原俊成女（ふじわらしゅんぜいのむすめ）は、物語評論『無名草子』（むみょうぞうし）の中で「狭衣こそ、源氏に次ぎてはようおぼえ侍れ」と指摘しており、実際、中世王朝物語の中には『狭衣物語』の影響を強く受けている作品も少なくない。「少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ…」と中国の詩人白楽天の漢詩集『白氏文集』所収の詩句を踏まえた冒頭部は特に有名。展示品は、江戸時代初期頃の書写と思われる。



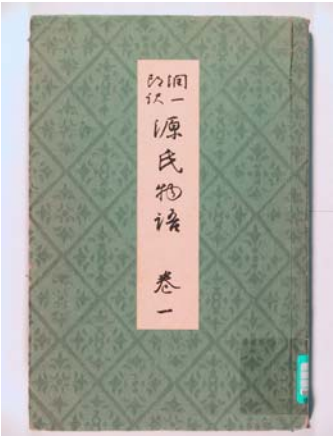
図版10（左）：『狭衣物語』第一冊表紙
図版11（右）：『狭衣物語』冒頭部

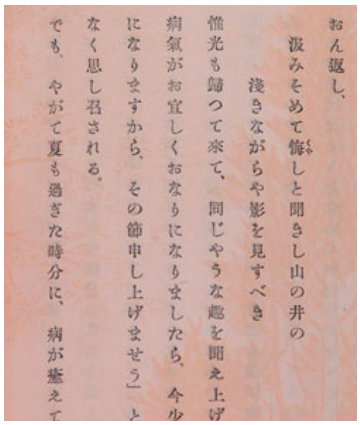
『浜松中納言物語』 写本　四冊　〔国文二三五三N〕
『更級日記』の作者で、『源氏物語』の熱狂的な読者であった菅原孝標女（すがわらたかすえのむすめ）の作かと考えられている物語。男主人公中納言の恋愛や恋人の転生等が日本、唐土を舞台に展開される。『源氏物語』宇治十帖の影響が従来指摘されている。展示品は、書写者、書写年次等は不明ながら、誤写脱文の少ない善本の一つと言われている。讃岐金刀比羅宮旧蔵本。なお、三島由紀夫は、この物語をモチーフにして遺作『豊饒の海』を著した。

図版12（左）：『浜松中納言物語』第一冊表紙
図版13（右）：『浜松中納言物語』冒頭部

4.『源氏物語』の現代語訳

「谷崎潤一郎訳『源氏物語』」初版本　〔佐々木文庫〕
谷崎潤一郎が最初に出版した『源氏物語』の現代語訳。昭和14年に発刊されたが、光源氏と藤壷との密通の件が削除されているなど、当時の社会状況を色濃く反映したものとなっている。『源氏物語』の現代語訳は、今日まで様々な作家の手によってなされている。





図版14（左）：
谷崎潤一郎訳『源氏物語』巻一表紙

図版15（右）：
谷崎潤一郎訳『源氏物語』若紫巻
本文最後から二行目「…思し召される。」（光源氏が北山に消息を送る件）と最終行「でも、やがて夏も過ぎた時分…」（光源氏が帰郷した尼君のもとを訪れる件）との間に、原文では、光源氏と藤壷との密通、藤壷の懐妊が描かれる。